

一般社団法人
兵庫県病院協会
会報

● 発行 ●
一般社団法人兵庫県病院協会
〒651-0086
神戸市中央区磯上通
6丁目1番11号
兵庫県医師会館7F
TEL (078) 251-3030
FAX (078) 251-3011
会報編集委員会
印刷 株式会社 七旺社



目次

— 巻頭言 —

リサーチマインドを持った医師の育成

(一社) 兵庫県病院協会副会長

国立大学法人神戸大学 神戸大学医学部附属病院 前院長 平田 健一 3

— 随筆 —

将来への不安

(一社) 兵庫県病院協会理事

医療法人社団六心会 恒生病院 理事長 古瀬 繁 4

超えるべき課題

(一社) 兵庫県病院協会理事

医療法人社団緑風会 龍野中央病院 理事長・病院長 井上 喜通 6

= 会員病院紹介 =

姫路赤十字病院

病院長 岡田 裕之 7

= 事務局短信 =

令和4年度 近畿病院団体連合会 第2回委員会 10

令和4年度 病院看護職員等研修会開催報告 11

= 編集後記 =

(一社) 兵庫県病院協会副会長・会報編集委員長

社会医療法人愛仁会 明石医療センター 名誉院長 澤井 繁明 12



明石海峡公園 (淡路市)

〈表紙の写真〉

国営明石海峡公園は、兵庫県淡路市(淡路地区)と神戸市北区・西区(神戸地区)と淡路地区の総面積330ヘクタールの国営公園です。もと「灘山」という標高約160メートルの海に迫った山でしたが、一九六三年から山は切り崩され、大阪港ベイエリアの埋め立て用の土砂として運び出されました。その結果、岩盤がむき出しとなった広大な土地の緑化が大きな課題となりました。再造成は、多額の経費を要するので岩盤斜面のまま植栽することになりました。土砂採取跡地には淡路夢舞台が整備され「国際的でリゾート感溢れる海辺の園遊空間の創造」を基本として「淡路花博ジャパンフロラ2000」が開催されました。近年、リゾート地として様々な施設が開業している淡路島の観光スポットのひとつです。

巻頭言

リサーチマインドを
持った医師の育成

(一社)
兵庫県病院協会 副会長
国立大学法人神戸大学
神戸大学医学部附属病院
前院長 平田 健一

昨年（2022年）はカタールでサッカーワールドカップが開催されました。日本は予選リーグでスペインやドイツを破りベスト16に進出するなど日本中で盛り上がりを見せました。今では多くの若手選手がイギリスやスペイン、ドイツなどの海外リーグに挑戦しています。メジャーリーグでも大谷翔平選手をはじめ多くの日本人選手が海外で活躍するなどスポーツ選手は若い時からグローバルな視野で未来の目標に向かって挑戦しています。以前日本人選手はサッカーや野球の世界で通用するとは思われていませんでした。しかし、現在では多くの選手が世界で活躍しています。個々の能力が発揮されるには若い時期からのキャリア形成のための環境が重要です。

2004年（平成16年）に医師臨床研修制度が開始され、2017年（平成29年）から新専門医制度が導入されるなど日本の医学部学生や若手医師を取り巻く環境は大きく変化しています。医学生や研修医、専攻医はどうしても短期的な目標に囚われがちで、長期的な目標を持つことが難しい時代になっています。基礎研究や海外留学を経験する人も減ってきています。基礎研究や海外留学を経験することはグローバルな視野を持ち、リサーチマインドを持った医師の育成に役立つと思います。様々な疾患を抱える患者さんの診断、治療において教科書やガイドラインでは解決できないことが数多くあります。研究なくして臨床の発展はありません。いまだに疾患の原因が不明で治療法もな

い病気が数多くあります。このような患者さんを救うためにも研究は重要で、海外留学も世界の状況を知り、日本を外から見る重要な機会です。

新型コロナウイルス感染の拡大のために留学を諦めたり、短期間で留学を切り上げて帰国を余儀なくされる人がいました。新型コロナウイルス感染が落ち着いてきた現在も日本経済は厳しい状態になり円安が止まらなくなっています。また、アメリカをはじめ海外では物価が高騰し、家賃も非常に高くなるなど海外留学にはかなりの費用が必要となっています。アメリカでは一定の奨学金や給料を確保していないとビザを取得できなくなってきました。以前は無給でも留学できた時代がありました。アメリカでは200～300万円の留学助成金を獲得してもビザ取得ができないなど留学のハードルが上がっています。日本は、バブル崩壊後少子高齢化が進むなど多くの課題を抱え、30年以上経過しても不況から抜け出せていません。海外では給与が増えています。日本の給与は増えておらず、円安のために海外留学の生活費を用意することが厳しくなっています。若手医師の海外留学を支援する制度の充実が必要です。海外留学をしなくても日本国内で充実した研究生活ができればそれに越したことはありません。医学・生命科学の基礎研究分野は、日本は世界でもトップクラスでしたが現在では中国をはじめ多くのアジア諸国にも追い抜かされその位置は低下しています。90年代末に日本が4位につけていた注目論文数ランキングも2010年代後半には9位にまで後退し、2位につける中国の後塵を拝しています。山中先生や本庶先生がノーベル賞を受賞するなど日本の研究力は世界に誇るべきものがありますが、未来の研究者の活躍のためには、未来で活躍する人材への投資が必要です。

2024年にスタートする「医師の働き方改革」では労働と自己研鑽の境界がはっきりせず、将来のキャリアを形成するため研究等の自己研鑽の時間が制約されてしまうことが危惧されます。プロスポーツ選手やオリンピックを目指す選手は目標に向かって常時最大限の努力をしており、練習時間に上限を設定することは考えられないと思いま

す。強制的に労働を強いることは絶対にあっては
いけないですが、基礎研究など研究に没頭する時
期は、自分が心底面白いこと、楽しいことを見つ
けて、全力で取り組むことが大切で、医師として
成長する上で良い経験だと思います。日本で若手
研究者が研究に集中できる環境を提供するととも
に、国際化を支援することで日本の研究力が回復
し、リサーチマインドを持った医師が育つことを
期待します。

随 筆

将来への不安



(一社) 兵庫県病院協会 理事
医療法人社団六心会
恒生病院
理事長 古瀬 繁

昨秋、外来診療から退き医師としての現役を終
え、今は法人理事長としてのみ仕事をしている。
医療現場から解放されてストレスがなくなりほっ
としてしている。月曜日から金曜日まではこれまでと
同様に病院に来ているのだが、会議、面談などが
なければ特にすることもないので、時間を持て余
す。まさしく「欲しかった 自由と時間 もてあ
ます」(ポプラ社 シルバー川柳 より)である。
これまでも週に一冊位の本は読み、映画も1～
2本は鑑賞してきたが、それ以外に何か新たにす
ることがないかを模索してみたが特に浮かばな
い。そこでとりあえず、この1～2年のベストセ
ラーを読んでみることにした。

「少女同志よ、敵を撃て」(逢坂冬馬著 早川書
房)は第二次世界大戦の独ソ戦におけるソ連兵の
女性スナイパーを描いたものだが、つついロシア
・ウクライナ戦争に重ね合わせて読んでしまっ
た。ロシア・ウクライナ戦争での市街戦の報道を
見て、当時も70年経った今も同じようなことが行
われており、戦争の理不尽さ、悲惨さが伝わって
くる。まさに時宜を得た本だ。これまでもそうだ
が、本屋大賞に選ばれた本は読みやすいし読み始
めたらグイグイ引き込まれてしまう。今や本屋大
賞に選ばれることは作家冥利につきるのではない
だろうか。

昨年のベストセラーといえば和田秀樹著の高齡
者シリーズ「70歳が老化の分かれ道」「80歳の壁」
「70代で死ぬ人、80代でも元気な人」だ。内容は



どれもほぼ同じであるが、一つの材料で何冊もの本を上梓するとは呆れるというなかれ。高齢になれば血圧、血糖値、コレステロール値を気にするな。クスリはリスク。高齢になれば誰でも認知症になるので心配するな。高齢者は癌の一つや二つは持っている。好きな食事をしてアルコールも飲みなさい。人間いつかは死ぬのだから好きなことをして自由気ままに生きなさい。先日まで脳神経外科医をしていた者としては内容に少々気になる点もあるのだが、一方、自分自身が高齢者になって気づいたことも多くあり、著者の言い分に納得する部分も多々ある。長寿社会になり、いつまで続くかわからない老後への不安は増すばかりだ。その裏返しがこのようなベストセラーになるのだろう。

「未来の年表 業界大変化」(河合雅司著 講談社現代新書)は2017年に発行されベストセラーになった「未来の年表」シリーズの最新版である。日本の人口減少(鳥根県が毎年消えていく)と高齢者が激増することによる日本の将来像を年毎の人口減少カレンダーとして描いたものである。数年経った今、著者の予言通りになってきていると感じる。未来の年表では2022年には一人暮らし社会が本格化する、2024年には3人に1人が65歳以上になる、2030年には百貨店も銀行も地方から消える、2035年には未婚大国が誕生する等々だ。駅前の銀行支店が閉鎖され支店の統廃合がすでに本格化しており、地方百貨店はもとより、そごう西武百貨店がファンドに売却される話もあり、すでに現実の事となっている。コロナ禍によりスピードが速まったようだ。今回の「業界大変化」では医療業界に起きることとして、医療ビジネスは高齢化に伴い患者数が増えることから表向きは有望に見えるが、内実はそうではない。2030年ころには人口減少とともに患者数が減り「患者不足」になるというのだ。また2032年以後は医師過剰になるとの予測である。患者が減れば医療経営にも影響が及び、撤退するところも出てくる。このように医療業界の将来は非常に暗い。

新型コロナ禍やロシアのウクライナ侵攻、資源高、海外の急激なインフレによる円安など予期せ

ぬ事象が起きている。我々医療界においても光熱費増大などの影響を受け、経営に大きなダメージを生じている。4月に日銀総裁が植田氏に代わるが今後、アベノミクスで生じた異常な低金利政策は間違いなく変更される。岸田総理はインフレを上回る賃金上昇を経済界に要請している。一部の大企業はそれに応じてベースアップを宣言しているし、トヨタなど労組の要求に満額回答する企業もある。大企業では賃金アップは可能かもしれないが、中小企業や我々医療・介護業界は普段からぎりぎりの経営を余儀なくされており不可能に近い。病院の医業利益率は2~3%と低い水準であり、今後社会保障費の増加が見込まれない中、賃金を上げれば将来的にどんどん人件費が上がり、経営が行き詰まるのは目に見えている。一方、2024年に医師の働き方改革など時間外労働が制限され、各職種で人が足らなくなり人の取り合いになる可能性が高い。介護関連の所得が一般企業平均の7~8割と低いなか人出不足が続いてきたが、今の診療報酬体系のままでは病院職員の賃金を上げることはできない。賃金上昇ができなければ、さらに輪をかけて人材不足になるだろう。人出が足らなくなるならば定年を延長して人を確保するという手段を取る病院も出てくるだろう。しかしその場合、労働生産性が落ちることになるし、実力ある若者の意欲を削ぐことにもなってしまう。若者に魅力ある職場が提供できなければ脱落していただけた。

私どもの病院は神戸電鉄沿線に位置するが、将来的に沿線人口が2割以上減少する。2035年には政令指定都市のなかで最も高齢化が進むのは神戸市で34.8%である。そういった厳しい環境において、また社会保障費が伸びないなか病院経営にどのような成長戦略を描いていくのか、病院淘汰の時代難しい命題である。私の目の黒いうちは「未来の年表」が現実のものとならないように、知力ある若い人たちと一緒に頑張っていくつもりだ。

超えるべき課題



(一社) 兵庫県病院協会 理事
医療法人社団緑風会
龍野中央病院
理事長・病院長 井上 喜通

近年、社会において様々な問題が取り上げられています。

中でも働き方改革、ライフワークバランス、ストレスチェックそして少子化対策は日本の社会課題として常に注目されています。

まず、働き方改革です。長時間労働や過剰なストレスは過労死や健康被害を引き起こすため社会的に深刻な問題とされています。今後も有効に働き続けるためには、労働時間や休暇制度を見直し柔軟な働き方を推進することが必要です。

それに加えてライフワークバランスの実現も重要です。現代の社会では仕事と生活が密接に結びついているため、働く人々にとってストレスや疲れがたまりやすくなっています。その為、ライフワークバランスを実現するためには、家族や友人との時間を持つこと、趣味やスポーツを楽しむことなど、社会的な援助とともに個々が自己実現するための時間を設けることが大切になります。

また、ストレスチェックは職場でのストレスを抱えている人を早期に発見し、ストレスの解消のための対策を講じることが目的です。ストレスチェックの実施は労働者のメンタルヘルスを守るために非常に重要であるとされています。忙しい仕事をしている中で、自分のストレスを認めることが難しいと感じる人も多いと思います。ストレスチェックは、そのような人々のストレスレベルをきちんと把握することができ、適切な対策を講じることができます。

そして最後に少子化対策の問題です。低出生率により、将来的には日本の人口が減少し、社会を

支える子供たちが育ちにくくなる恐れがあります。その為、少子化対策は国民全体の課題となっています。子育て支援の充実、仕事と家族との両立支援、年少者の働き方改善、分娩時の医療費支援などが効果的であるとされています。

以上の4つの問題について述べてきましたが、これらの問題を解決するためには、国民全体が自己実現や健康な生活を送ることが出来る環境を整え、社会的課題に取り組んでいくことが必要不可欠です。そしてこれらの問題に対しての取り組みが十分進められることでより豊かな社会になることを期待します。



会員病院紹介

姫路赤十字病院



病院長 岡田 裕之



はじめに

姫路赤十字病院は、1908年4月に兵庫県立姫路病院が日本赤十字社に移管され、日本赤十字社兵庫支部姫路病院になったことを起源としており、日本赤十字社91病院中8番目に長い歴史をもつ病院です。2001年10月、姫路市龍野町から西に4km離れた現在の姫路市下手野に新築移転しました。播磨・姫路地域の高度急性期・急性期医療を担う基幹病院であり、33診療科、病床数は感染病床6床を含む560床です。職員数は医師217名はじめ1,325名です。主な施設基準は、地域がん診療連携拠点病院（高度型）、がんゲノム医療連携病院、地域医療支援病院、総合周産期母子医療センター、災害拠点病院、DPC特定病院群です。2021年度の病床稼働率83.7%、平均在院日数9.1日、手術件数は8011件、救急車応需3,843件を含め救急受診は11,896件でした。2022年9月には病院機能評価3rdG:Ver2.0を受審し認定を受けました。

高度急性期・急性期病院

手術や救急医療そしてインターベンション治療を中心にあらゆる分野で質の高い医療を実践すべ

く務めています。内科、外科などの診療科枠を越えた各疾患群のセンター化を実施しています。内科から外科に転科しても患者さんは病棟を移らなくてもよく、看護師も変わることなく担当を続けるので病状の理解も深まり、患者さんの安心感も強く、転科時の申し送りなどの手間も省け、診療の円滑化に繋がっています。

地域がん診療連携拠点病院

内視鏡治療、薬物療法、放射線治療、そしてロボット支援手術も含めた手術療法など先進的ながん治療を積極的に推進しています。外科系診療科ではロボット支援手術の保険適用が拡大してきており、当院でも年間200件を超えてきています。昨年12月に2台目の手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」を導入しましたのでさらなるロボット支援手術の増加が見込まれます。昨年、神経内分泌腫瘍（NEN）センターを立ち上げ、新たな治療であるペプチド受容体核医学内用療法（PRRT）を2月から開始しました。また、頭頸部癌に対する光免疫療法（アルミノックス）も行える体制です。化学療法センターで薬物療法も積極的に行い、年間16,000件実施しています。さらに緩和ケアの充実、在宅医療の支援もおこなっています。

がんゲノム医療連携病院

がんゲノム外来を設置しており中核拠点病院である岡山大学と連携して標準治療が困難な場合に、がんの原因となっている遺伝子異常を調べ、その異常に対して効果のある薬剤を見つけて患者さん毎の個別化治療が行えるように努めています。また、遺伝性乳癌卵巣癌症候群（HBOC）などの遺伝性疾患診断とカウンセリングおよび複数癌のサーベイランスを行っています。

地域医療支援病院

地域の医療機関との機能・役割分担を積極的に進めるために、地域医療連携室が積極的に活動し

て病病連携、病診連携が迅速、円滑に進み、途切れることのない医療が行えるように努め、従来の「病院完結型」ではなく「地域完結型」医療の中核を担っています。2021年度の患者紹介率90.8%、逆紹介率104.5%でした。

2023年1月電子カルテの更新を行い、加えて通院支援アプリを導入し、慢性的に苦情の多い診察・待ち時間短縮、クレジットカードによる自動会計システムの運用を開始いたします。

総合周産期母子医療センター

中・西播地域の周産期医療の中核病院として産科と小児科が連携してハイリスクな妊婦さん、新生児の安全に努めています。集中治療室として母体胎児集中治療室(MFICU)、新生児集中治療室(NICU)、新生児回復室(GCU)を完備しています。また、姫路・播磨医療圏の妊産婦、子供の新型コロナウイルス感染診療をほぼ一手に引き受けて診療しています。コロナ陽性妊婦の分娩に加えて、第6波、第7波では生後間もない乳児も含め子供の感染者が激増しました。

人材育成

初期臨床研修病院として研修医定員14名がフルマッチ、初期研修歯科医も毎年1~2名を確保しています。さらに2年間の初期研修を終えたのちは、内科専門医、放射線科専門医に関しては当院独自のプログラムによる研修を行っており、本年4月からは7名の内科専攻医が研修する予定となっています。さらに医師の業務の一部を看護師が代行で担うことができる特定看護師育成にも力を入れており、特定行為指定研修機関に認定され、現在18名(延46医療行為)が資格を取得しております。医師の働き方改革のためのタスクシフトの実践に繋がると考えています。また、附属看護専門学校の各学年約40名の卒業生の9割は当院看護師として入職してくれています。

赤十字病院として

赤十字社の使命である「人道の実現」のため、また、災害拠点病院として災害発生時には力を出

し、地域はもとより国内外に対して責任を果たしています。昨年12月レバノンの難民キャンプに派遣されていた看護師が帰国しました。また、今回のトルコ・シリア地震においても日本赤十字社からの要請があり、2名の看護師がスタンバイしており、内1名は4月からシリア派遣が決定いたしました。

おわりに

今後も地域住民に必要とされる機能を整え、地域医療機関と緊密な連携をとり、心のかような安全で良質な医療を実践し、働きたい病院、治療を受けたい病院、そして地域に選ばれる病院であるべく努めてまいります。引き続きご協力ご支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

病院的概要

名 称：姫路赤十字病院
 所 在 地：670-8540
 姫路市下手野1丁目12-1
 T E L：079-294-2251
 F A X：079-296-4050
 開 設 者：日本赤十字社
 開設年月日：明治41年4月1日
 病 床 数：560床(一般554床、感染6床)
 診療科目：33診療科
 職 員 数：正規職員1,325名(医師217名)

病院の沿革

明治7年4月 医師有志が発起し寄付金で、姫路城廓内に会社病院なるものを創立したものをもって姫路病院の創始とする
 明治9年1月 公立病院創立の旨、旧飾磨県より達せられ創立する
 明治15年12月 公立病院を廃し県立病院とする
 明治33年5月 病院の所在地を南町から、姫路市龍野町に移転
 明治41年4月 日本赤十字社兵庫支部の管理となる(姫路赤十字病院創立)
 大正3年11月 本館、その他付属家屋を焼失

大正4年4月 本館並びに診療室等を新築
 大正7年1月 日本赤十字社兵庫支部療養所を本院が管理
 昭和12年12月～15年5月
 姫路陸軍病院姫路赤十字病院として軍患者を収療（入院のみ）
 昭和18年1月 日本赤十字社兵庫支部姫路病院を姫路赤十字病院と改称
 昭和20年6月～8月
 姫路陸軍病院姫路赤十字病院として軍患者を収療（入院のみ）
 昭和23年2月 看護婦生徒養成所を姫路赤十字看護学院と改称
 昭和25年3月 姫路赤十字看護学院を姫路赤十字高等看護学院と改称

昭和43年11月 病弱学級を設置
 昭和51年4月 看護学院を姫路赤十字看護専門学校と呼称
 平成13年11月 姫路市下手野に新築移転
 平成25年6月 病棟改修工事竣工、病床数を一般549床、感染症6床、計555床とする
 平成30年7月 NICUを拡張移転（3床増床、計18床）、GCUを拡張移転（2床増床、計24床）、病床数を一般554床、感染症6床、計560床とする
 令和3年6月 PET・コミュニティ棟竣工



救護看護婦像



ハイブリッド手術室



手術支援ロボット (da Vinci) 手術



NICU

＝事務局短信＝

令和4年度近畿病院団体連合会 第2回委員会

令和5年2月16日（木）13:30～17:00 近畿病院団体連合会の委員会がWEB会議方式により開催されました。京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、滋賀県の10の病院団体が参加しました。

当協会からは大村会長、太城副会長、大西副会長、平田副会長が参加しました。

担当県である滋賀県私立病院協会仲成幸副会長の司会で、滋賀県私立病院協会小椋英司会長の開会挨拶があり、続いて来賓として三日月大造滋賀県知事からのビデオメッセージが紹介され、滋賀県健康福祉医療部角野文彦理事の来賓挨拶がありました。

議事に入り、小椋英司会長が議長に選出されて議事進行を行い、以下の2点の提案議題について、報告、協議がありました。

①医師の働き方改革に向けた対応状況（宿日直許可、医師労働時間短縮策定及び医療機関勤務環境評価センターへの評価申請等）について

（奈良県病院協会・滋賀県私立病院協会）

②電気・ガス料金、食材料費等の高騰対策について
（奈良県病院協会）

兵庫県からは今回の担当となった兵庫県民間病院協会の西会長から兵庫県医療勤務環境改善支援センター（兵庫県医務課）の提供資料をもとに報告がありました。

当協会からは平田副会長から、県域が広くいわゆるへき地では医師の減少がさらに進み確保が見込めず、労働時間短縮計画や宿日直体制づくり自体が困難となっており大都市部との較差が顕著であるとの報告がありました。また、他院からの医師派遣に関連しての議長からの問いかけに対し、平田副会長から地域医療確保に貢献するため派遣の継続を図り規制の範囲内で対応できるよう努力しているとの回答がありました。

物価高騰対策については、府県により支援の水準に差があることが明らかとなり、今後一層事態が深刻となることを見込まれることから、さらなる支援を求める声をあげる必要があるとの議論がなされました。

議事終了後、比叡山観明院住職 宮本祖豊氏より「困難に打ち勝つ方法」と題した過酷な修行を通して得られた貴重なお話を伺うことができました。

最後に、次年度担当の京都府私立病院協会清水鴻一郎会長から5類移行後での京都開催について熱い思いが語られ、閉会となりました。



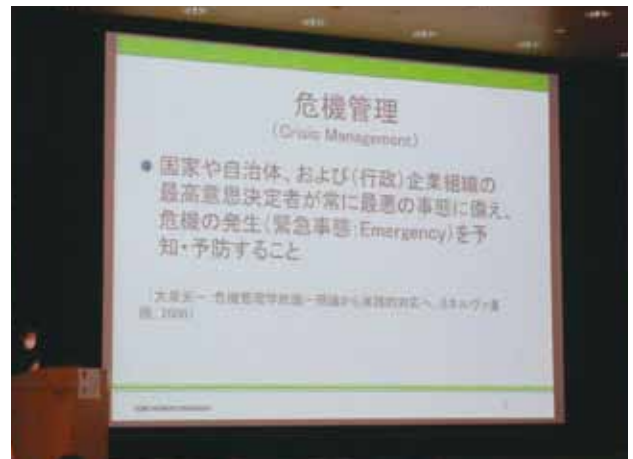
令和4年度 病院看護職員等研修会開催報告

令和5年3月1日（水）に兵庫県医師会館2階大会議室で、当協会主催の「令和4年度 病院看護職員等研修会」が開催されました。令和3年度は研修会の開催はなく、令和2年度も看護職員研修はありませんでしたので、3年ぶりの開催となり、71名の出席がありました。

冒頭、大村武久会長から、本日3月1日はちょうど3年前に兵庫県内ではじめて新型コロナウイルスの患者が確認された日である、3年間でのウイルスの変異があり、患者、症状の傾向、医療への影響などに様々な変化があったことに触れ、今後の動向は不明であること、また、感染症以外にも災害やサイバーセキュリティなど危機管理のマネジメントが重要であることから、洪愛子先生に本日の研修会をお願いしたとの挨拶がありました。

太城力良副会長・研修委員長が座長となり、講師紹介のあと、神戸女子大学看護学部長洪愛子先生による「危機管理に必要なマネジメントを考える」と題した講演が始まりました。

講演では、新型コロナウイルス感染症対応から学ぶポイントとこれからの危機管理での看護師の役割と期待が二つの柱となりました。日本管理看護学会の報告や聖マリアンナ多摩病院の倫理指針などを紹介して組織として、管理責任者として必要なことや役割などについて説明がありました。また、現代のVUCAと言われる正解のない時代に対応するにはOODA観察（Observe）情勢判断（Orient）意思決定（Decide）行動（Act）が必要で、臨機応変に柔軟に対応できるレジリエンスを内面に育むことが重要であるとのことでした。



編集後記

やっとコロナ感染症も落ち着いてきて、マスクも個人の判断にゆだねるということになり、2類が5類に変更になるようで保険請求の問題は残るとしても世の中がやっと3年前に戻ってきたように思え、周囲が明るく元気が出てきたような気がします。

巻頭言では確かに平田先生が言われるように臨床研修が始まってから基礎医学に進む医師が非常に少なくなって来ていると聞きます。立派な臨床医になるためにもリサーチマインドは必要であるかと考えますが若い医師を取り巻く環境が変わってきているようで、このことに関して問題意識をもって医療界全体で取り組むべきと考えます。今後の医療を考えると先々の不安感は大さくのしか

かり、超えるべき課題は多いですが、患者さんのためになすべきことをきちんとやるのが私たちの仕事と考え努力するしか仕方がないかと考えます。病院紹介は姫路赤十字病院について歴史、現状を詳しく紹介していただきよく理解できました。

ご多忙の中会報の発行にご協力いただきました、執筆の先生方、編集事務の方々に心より感謝いたします。

(一社) 兵庫県病院協会副会長・会報編集委員長
澤井 繁明
社会医療法人愛仁会
明石医療センター 名誉院長 記

